

## 8人の女たち 古典ネパール語の抒情詩

北田 信

大阪大学世界言語研究センター

18世紀末ドイツの街ヴァイマルでは文豪ゲーテが青年詩人シラーとの交友を深め、その結果としてドイツ文学の金字塔『ファウスト』が著された。ふたりの人の心の交流が一国の文化とアイデンティティーのよりどころとなるような文学作品・潮流を生み出したという好例である。

これより一世紀ほど前に、ネパール・カトマンドゥ盆地の街バクタプルで、やはり同じように二人の詩人が友情を育み、ネパール古典文学の新しい潮流を創始した。この当時、カトマンドゥ盆地には三つの都市国家、カトマンドゥ (Nw. Yeṃ)、パタン (Skt. Lalitapur, Nw. Yala)、バクタプル (Nw. Khwopa) が隆盛を誇り、三つ巴となって勢力をあらそっていた。その競争は軍事面だけでなく芸術文化におよび、その結果、三都市にはそれぞれ優れた建築群が競って建立され、今日では重要な観光名所となっている。パタンは芸術家の都市として知られ、今でも街を歩くと、細く曲がりくねった路地のあちこちから、金属細工師が製造中の仏像・神像をトントンと叩く音が聞こえてくる。

これに対してバクタプルは芸能の都として知られている。ナヴァ・ドゥルガー・ガナと呼ばれる仮面舞踊やディメー (dhime) と呼ばれる太鼓、その他にも様々な芸能が伝わっている。毎年サーヴァン (Skt. Śrāvaṇa) 月には街の辻の至る所で音楽劇が演じられ、観衆が集まってやんやと観劇している。ネパール族の伝統的な住居は上へ上へと延びる三階以上の高層住宅であり、上層階の窓やヴェランダが、この日は素敵なバルコニー席へと変身するのだ。現在は男女の格好をした道化が恋のエピソードを滑稽に演じて笑いをとる、というコメディ寸劇が中心であるが、以前はシリアスな内容の長めのものも演じられていたという。近年加速する近代化によって、こういった古くからの芸能はだんだんと先細りになっているようだ。

バクタプルの芸能は、この都市の支配者たちによって振興されてきたようである。たとえば、雨期のサーヴァン月の一大イベントであるガイ・ジャトラ、直訳すると「牛の行進」という祭りは、その年に死者を出した家族が、牛の像を載せた山車を牽き笛と太鼓の楽隊を引き連れて、都市の定められた道順を回って一周する、というものであるが、次のような伝説がある。

昔、バクタプルの王妃が子供を失い、悲嘆にくれながら日々を送っていた。王はこれを慰めるために、ガイ・ジャトラを催した。王宮の高いところからこれを見物した王妃は、愛しい者に先立たれた悲しみを味わっている者は、自分だけではないのだ、という事実気付、諦める。ガイ・ジャトラは身内を失った家族が、歌舞音曲で楽しみ、心を癒すための祭りである、という。

この伝説が示すとおり、マッラ王朝時代のバクタプルの王たちは文学・芸能を熱心に保護した。インドからこの地に移住してきた詩人たちは手厚く庇護され、ベンガル語やミティラー語による創作活動を盛んに行った。さらに、これに範をとって、ネパール語による抒情詩・戯曲が著されるようになる。今日、古文書館には膨大な量の詩集・戯曲・音楽論書の写本が保存さ

れているが、その大部分は、この時代のバクタプルで著作されたものだという。これらの写本の研究はあまり進んでいない。

1643～72年にバクタプルを収めたジャガトプラカーシャ・マツラ Jagatprakāśamalla 王も、このような芸術振興に力を入れた為政者の一人である。Brinkhaus 1987<sup>1)</sup>の解説によれば、彼にはミティラー出身の詩人チャンドラシェーカラシンハ Candrasēkharasiṃha という親友がいた。詩歌をこよなく愛する支配者と才能ある宮廷詩人が互いに刺激し合い、優れた詩、戯曲を多数生みだした。

中でも特筆すべきは、古典ネワール語で書かれた初の戯曲 Mūladeva-śaśideva-vyākhyāna-nāṭaka である。大盗賊ムーラデーヴァとその相棒シャシデーヴァを主人公とするいわゆる悪漢文学(ピカレスク文学)が一国の文学の創始期を飾っているというのは、ユニークでなんとも魅力的である。大盗賊ムーラデーヴァに関する記述はインドのサンスクリット美文学やジャイナ教のプラクリット文献に散見されるが、断片的な言及がほとんどで、ここまでまとまった分量をもつ資料は珍しい。

詩人チャンドラシェーカラシンハはしかし、急逝してしまう。友人を失ったことによる王の悲痛は非常に大きかったようであり、それ以降、王は自作の詩の末尾に記す作者名を、自分の名と詩人の名を組み合わせた筆名 Jagat-candra と記すようになった<sup>2)</sup>。

ここに訳出する古典ネワール語の短い抒情詩もこの時期に著されたものであり、作者名は Jagat-candra の変化した Jagata-canda となっている。著者は2011年2～3月にカトマンドウに滞在した際、Nepal Research Centre を訪れ、古典ネワール文学の大家カーシーナート・タモット先生にいくつかのテキストを講読していただく、という幸運に恵まれた。この翻訳も、その時のノートをもとにしている。原文は Tulasīlāl Siṃha 校訂 Nepālabhāṣā Pulāṅgu Kāvya『ネパール語(=ネワール語)の古いカーヴァ詩』(発行年・出版所ともに不明)に所収のものである。サンスクリット抒情詩(カーヴァ)は、演劇学・作詩学に定められるナーヤカ(男性主人公)・ナーイカー(女性主人公)の人物像にのっとり恋愛の様々なシチュエーションを描く。古典ネワール語の抒情詩もインドの作詩の決まりごとを守って作られている。このテキストでは、サンスクリット古典詩の規定をもとに8種のナーイカー(ヒロイン)の人物像を描写している。

#### 1. 男が旅に出て留守にしているときの女 (proṣitabhartṛkā)

ラーガ・ダナシュリー ターラ・カルジャティ

カウボーイ(クリシュナ)に置いて行かれ、心はここになく、喜びは空っぽ。うら若き乙女の身体は今や無駄になった。

牛飼い女たちの主(クリシュナ)はものすごいイケズ。まるで稲妻のように「現れてはすぐに消え去り」外つ国に行ってしまった。

黒い体に蓮華の花弁のような目、その顔は、いくら眺めても飽きることがない。口で竹笛を吹きながらカダンバの木の下にいる。この人が私の心の首飾り<sup>3)</sup>。

あの人がいなければ私に生命があっても、なんの意味もない。夫を亡くしたラティとおなじ<sup>4)</sup>。

あの人とともに悦ぶ夢を見て [目覚めたらひとり]。罪深い私のような女の身体から、生命はどうして立ち去らないのか？

作者ジャガタチャンダは言う。「牛飼い女の心は痛む。“男に旅立たれた女”(proṣitabhartṛkā) とはこの様である。優れた芸術鑑賞者 (rasika) は女主人公の分類として、8人の女性、8種類を知るべきである。」

## 2. 粉碎された女 (khaṇḍitā)

ラーガ・ヴィバーサ ターラ・エーカーターラ

主クリシュナよ、朝あなたはなぜ御顔をお見せになったのか？（リフレイン）

他の女と契って、頬には噛まれた歯の跡があり、あなた<sup>5)</sup>の心はかき曇る。  
花の首飾りが台無しになった。

[夜通しの愛戯をして] 眠気によってなんだか赤い目をしている。  
ご自分の有様を見てごらんなさい<sup>6)</sup>。

愛（浮気？）によりこんな風体になり、朝、私に見せつけるという  
あなたの本性を見て涙が溢れる。

恋の力の所為で、か弱き女性の心は罪深い。  
男は蜜蜂<sup>7)</sup>だと知るの容易いのに。

ジャガタチャンダは今、二人目の女性に会う。  
このような女性を“粉碎された女”(khaṇḍitā) という。

## 3. 欺かれた女 (vipralabdḥā)

ラーガ・ブーパーリー ターラ・カルジャティ

あの人は逢えるという合図をした。  
[女友達が訊く]「あなた、金のアクセサリー、晴着をまとっているのはなぜ？」

恋、ゴーヴィンダ（クリシュナ）の本性を見て  
心も、この生命も、じっとしてはいられない。

身体だけがここにあり、心はあちらにいる。  
友よ<sup>8)</sup>、私を [あの人のところに] 連れて行って。ハリ（クリシュナ）だけが希望。

間違いのようになって生命を捨てていた。  
蓮華の花弁の瞳。私の身体の終末<sup>9)</sup>。

ジャガタチャンドは [この種の女主人公の] 性質と有り方 (guṇa-dharama) を把握して言う。  
「この女性は “ 欺かれた女 ” (vipralabdā) をどのように説明しようか？」

#### 4. 逢引に急ぐ女 (abhisārikā)

ラーガ・ケーダーラ ターラ・不明<sup>10)</sup>

女がひとり、マーダヴァ (クリシュナ) への愛の貪欲により狂った。(リフレイン)

私はハリを切望して夕暮れ時に家を抜け出した。  
白い衣をまとい、鬘を編み上げ、とても美しく [化粧して]。  
ジャスミンの花をつけ、人々に知られずに、歩いて。

[会えるという喜びで] 体中が総毛立ち  
[恋の慄きで] 言葉が言葉にならず、話をすることもできない  
身体がふるえ、愛の状態により、幻惑 (mohana)<sup>11)</sup> がいともたやすくしのびこむ。

魅惑的な人 (クリシュナ) のところまではまだとても遠い。あの人の御足を見たいという切望。

三界に彼に匹敵する者はない。私はクリシュナの居場所を見るために行く。

ジャガタチャンドの心は牛飼女たちの主人 (クリシュナ) への恋慕で溢れる。  
「 “ 逢引に急ぐ女 ” (abhisārikā) の説明は、このように、男に会いたくてたまらない若い女たち。  
その瞳は雌鹿のようにつぶら。」

#### 5. 別離中、首を長くして待ち望む女 (viraha-utkaṅṭhitā)

ラーガ・シンドウラ ターラ・カルジャティ

心まま好きなように楽しげにふるまう。目の前にいる人たちなど誰もいないという風。  
姑は肩をいからせて<sup>12)</sup> 叱ったのに、てんで耳に入らないし気にも懸けない。  
美男子の姿を見たなら<sup>13)</sup>、心に愛の感情が沸き起こるのは至極当然だろう。

マーダヴァ (クリシュナ) が家に来てくれるというので私は座って待っていた。目には眠りが訪れなかった。

ハリが去ってしまったと思って<sup>14)</sup>、私の身体はこれほど憔悴する。

こんなにやわらかな花卉を敷きつめた心地良い褥に寝ていただくと思った。  
神を敬うかのようにパーン<sup>15)</sup>を差し上げて客人という神をもてなそうと。

ジャガタチャンダは心に想い起こして“首を長くして待つ女”(utkaṅṭhitā)の歌をうたった。  
「私に対する恐れにおびえず、この女性は心の赴くままに人々と彷徨する<sup>16)</sup>。」

6. 家を飾り付けてもてなしの準備をする女 (vāsakasajjā)

ラーガ・マーラヴァ ターラ・lām (?)

巷に言われる説明によれば、私[のようなひと]を“家を飾り付ける女<sup>17)</sup>”(vāsakasajjā)と呼ぶ。  
近所に住む友人たちはいろいろな言葉をいってからかう。

カルマ（運命）に書いてある通りのことが常に起こる。  
ハリが廻した苦しみ[の輪]が私にとっては大いなる[苦しみとなった]。

夜は過ぎゆく 待っているうちに もう睡蓮<sup>18)</sup>が咲いた  
チャメリ花の蕾がふくらみ 香りがただよった

ジャガタチャンダの願いは「恋人たちが一緒になれるように。  
牛飼女たちの主人（クリシュナ）への礼拝を私は喜んで行います。」

7. 恋人を自分の意のままにした女 (svādhīnapatikā)

ラーガ・サーランギー チャウ・ターラ

男は自分の意のままである。美男ゴーパーラよ。  
女と男は、お互いにとって、首飾りのようである<sup>19)</sup>。

顔で顔を見つめあって、この時を過ごす。  
女性がこれを得るためには、品行方正 (dharama) でいなくてはなりません。

正しきことと正しくなきことを知り、自らを峰のように高める努力をし<sup>20)</sup>、心で愛しなさい。  
君に会えなければ世界はすべて空虚に思える<sup>21)</sup>。

魅惑的な人（クリシュナ）がいないと一瞬でさえ一年のように思われる。  
主よ、私はもはや息絶え絶えです。

ジャガタチャンダは言う。「“恋人を自分の意のままにした女”(svādhīnapatikā)は  
夫と一緒に幸せに末長く暮らしている。」

3. “諍いで疎遠になった女”

ラーガ・シュリー ターラ・pra (?)

日々、夫と喧嘩するのが好き。男を軽蔑し

悪い人の話を耳にしては、心の中で「全くそのとおり」と肯定し、ありもしないことについて諍う。

恋する女が怒ったときの、月が曇ったみたいな顔を見ると、喜びがある<sup>22)</sup>。

君の下唇はシタフォル花のようだし、盛り上がった鬢には蜜蜂のように [真黒だ]

美女の心には自在神 (Svayambhū)・大神がいらっしゃるにちがいない。その姿を見て世界が魅了されてしまう。

ジャガタチャンドは言う。「徳者よ！女主人公の諸特質と女主人公の分類を言った。

昼も夜もあなたに帰依します。あの方と結ばれることを心に願って、いま、言いました。」

冒頭で述べたように、古典ネパール語の美文学はサンスクリット古典詩の決まりごとをそのまま踏襲して作られているから、言語が異なることを除けば、インドの抒情詩と内容的には共通している。しかし、観賞力のある読者は、ここに、サンスクリット古典詩にはないような伸びやかさ、しなやかさを感じ取るであろう。さらにまた、ところどころに現れるネパール語独自の表現法から、カトマンドウ盆地の風景をありありと想い浮かべることができるであろう。たとえば、昼間から逢引を思ってそわそわする嫁を、“乳房をしぼって”つまり、しわくちゃで垂れた乳をしぼるようにして肩をいからせて叱り飛ばす姑、という箇所には、ネパール族の町の老婆たちの姿が彷彿としてくるようである。「恋人たちが一緒になれるように」と祈らずには居られないジャガトプラカーシャ王の言葉からは、のどかな田園に囲まれた小さな都市国家を治める君主が、市民たちに親のように慕われ、市民の幸せを願っている姿が浮かぶ。今日でもバクタプルの五重塔（ニヤタポラ）やダッタートレーヤ神殿の前の広場にはトウガラシが筵に広げられて干され、アヒルがひょこひょこ歩いたりする。美女の心には自在神（スワヤンブー）がいるにちがいない、と詠嘆する人の心には、きっと、カトマンドウ盆地を見渡す丘の頂上のスワヤンブナート仏塔が念頭にあったはずだ。

夜は過ぎゆく 待っているうちに もう睡蓮が咲いた

チャメリ花の蕾がふくらみ 香りがただよった

この詩句のなかにゆっくりと流れている物悲しい甘美さが、この時代のバクタプルの都を包んでいた時間の感覚なのであろう。

【註】

- 1) Jagatprakāśamallas Mūladevaśāśidevavyākhyānānāṭaka. Das älteste bekannte vollständig überlieferte Newari-Drama. Textausgabe, Übersetzung und Erläuterungen von Horst Brinkhaus. Franz Steiner Verlag, Stuttgart. 1987.
- 2) Brinkhaus 1987 参照。
- 3) 私の心は常にクリシュナのことを想っている、ということ。
- 4) ラティ（“悦楽”）は愛の神カーマの妻。カーマがシヴァ神の瞑想を乱そうと試みたため、シヴァ神が激怒し、額にある第三の目でカーマを焼き滅ぼし、灰にした。ラティは嘆き、悲しんだ。
- 5) おそらくこの句は、クリシュナの容姿に浮気の跡を発見してショックを受けた女主人公を見ながら、女友達が発した言葉であり、“あなた”とは女主人公をさす。
- 6) 女友達がクリシュナの不実を諫めて言う。
- 7) 蜜蜂が花から花へと飛びまわるのと同じだ、ということ。
- 8) ラーダーが女友達に呼びかける。
- 9) Kāyāvasāna (Skt. kāya-avasāna). Kāyāva sāna と読めば、「[瞳が]きらきらとしているのを見て」という意味になる。
- 10) ターラ名としてその頭文字 lām̐ が記されている。たとえばチャチャー歌で用いられるターラには Lapaha という名のものであるが、そのことか？
- 11) Mohana “幻惑、魅了”はクリシュナのあだ名でもある。
- 12) Kocala cese. 原義は“乳房を結んで”つまり“胸をしぼって”。
- 13) タモット氏の解説によれば、絵に描かれた夫の似顔絵を見ている、という。しかし、この詩節を素直に読むと、村の人妻が、日が暮ればクリシュナと逢引できるという期待に、昼間から上の空でいる様子を描いているようである。
- 14) Hariyā gamanasa bhāvana yāse. もし Skt. gamana を āgamana “来訪”の意味でとっていいのなら、「ハリがいらっしゃるといふ思いをなして」となる。
- 15) キンマの葉にビンロウジやカテキューなどの薬味やライム、その他を加えて噛む嗜好品。
- 16) この詩節は意味不明。Virahotkaṅṭhitā というよりも、むしろ abhisārikā についての記述のように思われる。ジャガタチャンドはこの詩句を「思い出した」というが、記憶に混乱があったのか？
- 17) 来るかどうかわからない恋人の言葉を信じて、うきうきと家を飾り付ける。
- 18) 原文は paṃple で、通常はハスと訳すが、ここでは文脈に従い、睡蓮とした。この作品の中で最も美しい箇所であり、ネワール文化の繊細さがよく表現されている。

ただし、サンスクリット古典文学の詩作の決まりによれば蓮華は昼間咲き、睡蓮は夜咲く、というから、もしこれを“ハス”の意味で取るならば、夜が過ぎてしまって朝の陽光が差し、それに反応してハスが咲いてしまった、というような意味になる。
- 19) 常に胸に抱きしめている、常に心に想っている、ということ。
- 20) Śikharapu. ヒマーラヤの峰々のように、あるいは、ネワールの寺院建築の屋根の尖端 (gajura) のように。
- 21) Jagatasa loka dako che sose leṃṃa. 意味不明。直訳すると「世界に人々がいるのに、君を見れば、残っている」あるいは「世界に人々は皆、君を見て（見るために）残っている」。タモット氏の解釈に従う。
- 22) 美人はちょっとすねたぐらいが却って魅力的だ、ということ。

注記

本稿は科学研究費補助金・若手研究（B）「チャリヤーパダ写本と南アジアの口頭伝承」（21720019）の助成を受けた研究の成果である。